

近畿ソーシャルビジネスフォーラム2011

平成23年2月19日(土)、TKP大阪梅田ビジネスセンターにて「近畿ソーシャルビジネスフォーラム2011」が開催された。SBに関心ある約100名の参加者が集まった。

冒頭、近畿経済産業局 地域経済部次長 伊藤哲郎より「今回のフォーラムは3年間実施した近畿SBN事業の集大成であり、この3年間で構築されたネットワークを今後とも活かしてほしい。」というメッセージとともに開会の挨拶をいただいた。



第一部の基調講演は、早稲田大学 商学学院院長兼商学部長の恩蔵直人氏より、「ソーシャルマーケティングの勧め」というテーマで講演いただいた。

企業が経営に苦戦している現状の背景には、コモディティ化・海外企業との競争の激化・消費者意識の変化が挙げられる。そこで、この講演のテーマでもあるソーシャルマーケティングに目を向けることで、企業が元気を取り戻す傾向にある。また、この社会志向の動きは今後多くの企業にとって避けることができないと述べられた。ソーシャルマーケティングが行われている背景や現状をお話いただいたあと、具体的な事例をいくつか紹介していただいた。

第二部は「ヒト・モノ・カネを動かして地方と都市をつなぐソーシャルビジネスとは」というテーマでパネルディスカッションを行った。はじめにパネリストである株式会社高田自動車学校 代表取締役社長 田村満氏と、NPO法人おぢかアイランドツーリズム協会 専務理事 高砂樹史氏のお二方よりそれぞれが取り組むソーシャルビジネスについての概要をご説明いただいた。



岩手県に位置する高田自動車学校は、そのターゲットである18歳人口が減少傾向にあり、今後も期待できない状態であるという問題を抱えている。そこで、合宿免許に加え地域の特性を活かした農業体験を組み込んだプランを作っている。閑散期には、同社の従業員が農業に従事しながら田畑を守り、他社との差別化を図るとともに地域に貢献している様子が説明された。



また、長崎県の小値賀島でツーリズムを展開する高砂氏は、おぢかという離島の魅力に魅せられた一人である。おぢかアイランドツーリズム協会は、リアリティを持たせることをビジネスポイントの一つとしており、お客様に島の生活に入ってもらい、直接自然にふれてもらう

ようにしている。次世代にも島を残すために、今後も豊かな自然と人情を大切に、それをビジネスにしていきたいと語った。

その後、SB事業者であるお二方に対し、会場から多くの質問が寄せられた。コーディネーターである京都産業大学 経営学部 ソーシャル・マネジメント学科 准教授 大室悦賀氏によって質問のうちいくつかをお二方に投げかけてい



ただいた。田村氏に対して「社員の農業に対する反応はどうか」と質問があり、「自動車教習は個人で対応しているため、仕事も一人一人孤立して動いていたが、農業をすることによって共同作業が増え、社員の意識も変わってきた」とSBのよって地域だけでなく企業の内部も変化したと述べられた。また、「人口減少が不利だといわれているが逆に有利になっ



てきているのでは」との質問もいただき、高砂氏より「実際に仕事のやりがいを求めて外から若い人たちが島で動き始めている。地方でも、同じ価値観の人たちがどんどん入ってきてコミュニティが結ばれている。都会よりも地方の方が危機感があるため、活性化されているのではないか」とお応えいただいた。

最後に、コーディネーターの大室氏より、「SBの場合、ビジネスのプロセスに社会的課題を取り入れていくことが重要である。SBが盛んになる一方で、NPOは一般企業に負けまいにもっと考えていかないとその存在意義を問われるようになるかもしれない。」とNPOに対しても言及され、パネルディスカッションを締めくくった。

次に、第三部となる「平成22年度近畿ソーシャルビジネス・ネットワーク報告」では、事務局長の山田裕子が今年度近畿SBNで開催した運営会議、資金循環研究会などの概要を説明した。また、今後の自立化に向けての計画を示すとともに、これまで構築したネットワークの重要性を述べた。

最後に、(特活)大阪NPOセンター 副代表理事の長谷川恵一氏より閉会の挨拶をいただき、今年度のフォーラムも大盛況のうちに終了した。

